

日蓮大聖人御書全集

そやにゆうどうどのごへんじ

曾谷入道殿御返事

によぜがもん こと

（如是我聞の事）

新版
1436
く
1439

そやにゆうどうどの(こへんじ) によぜがもん こと

曾谷入道殿御返事 (如是我聞の事)

けんじ ねん がつ にち さい そやきようしん

建治 3 年 (1177) 11 月 28 日 56 歳 曾谷教信

みようほうれんげきよういちぶいつかん しょうじきよう ごくよう

妙法蓮華經 一部一卷 (小字經) 御供養のために、御布施

こそでふたかさ がもくじつかん おうぎひやつぽん

に小袖二重ね・鵝目十貫、ならびに扇百本。

もんぐ いち い によぜ しまもん ほつたい あ き

文句の一に云わく『如是』とは、所聞の法体を挙ぐ。記

いち い ちようはち によぜ

の一に云わく「もし超人の如是にあらずんば、いづくんぞ

きよう しまもん うんぬん けごんぎよう だい い

この経の所聞となさん」云々。華嚴經の題に云わく

だいほうこうぶつ けごんぎよう によぜがもん うんぬん まかはんにやはらみつきよう

「大方広仏華嚴經 如是我聞」云々。「摩訶般若波羅蜜經

によぜがもん うんぬん だいにちきよう だい い だいびるしやなじんべん

如是我聞」云々。大日經の題に云わく「大毘盧遮那神變

かじきよう によぜがもん うんぬん

加持経 如是我聞」云々。

いっさいきよう によぜ によぜ

一切経の如是はいかなる如是ぞやと尋ぬれば、上の題目

を指して如是とは申すなり。仏、いずれの経にても、とか

たま によぜ とう ほとけ きよう 説

せ給いしその所詮の理をさして題目とはせさせ給いしを、

あなん もんじゆ こんごうしゆとう めつご けつじゆう たま とき だいもく 打

阿難・文殊・金剛手等、滅後に結集し給いし時、題目をう

ちおいて、「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」と申せ

置 によぜがもん われき もう

しなり。

いっさいきよう うち かんじん だいもく 納

一経の内の肝心は題目におさまれり。例せば、天竺と申

す国あり。九万里・七十箇国なり。しかれども、その中の

くに くまんり しちじつかこく せい たいもく なか

す国あり。九万里・七十箇国なり。しかれども、その中の

す国あり。九万里・七十箇国なり。しかれども、その中の

にんちく そうもく さんが だいち みな がっし もう にじ うち 歴 々
人畜・草木・山河・大地、皆「月氏」と申す二字の内にれきれき

たと いちしてんげ うち ししゅう なか いっさい

たり。譬えば、一四天下の内に四洲あり、その中の一切の

ばんぶつ つき うつ 少 隠 きよう

万物は月に移りてすこしもかくるることなし。経もまたか

くのごとく、その経の中の法門はその経の題目の中にあ

り。

あごんきよう だいもく いつきよう しよせん むじよう り 納

阿含経の題目は、一経の所詮、無常の理をおさめたり。

げどう きよう だいもく 阿漚 にじ 勝

外道の経の題目の「あう」の二字にすぐれたること

ひやくせんまんばい くじゅうごしゆ げどう あごんきよう だいもく き

百千万倍なり。九十五種の外道、阿含経の題目を聞いて、

じやしゅう たお むじよう しようろ 赴 はんによきよう だいもく

みな邪執を倒し、無常の正路におもむきぬ。般若経の題目

を聞いては体空・但中・不但中の法門をさとり、華嚴經の

題目を聞く人は但中・不但中のさとりあり。大日經・

方等・般若經の題目を聞く人は、あるいは析空、あるい

は体空、あるいは但空、あるいは不但空、あるいは但中・

不但中の理をばさとれども、いまだ十界互具・百界千如・

三千世間の妙覺の功徳をばきかず。

その詮を説かざれば、法華經より外は理即の凡夫なり。彼

の経々の仏菩薩は、いまだ法華經の名字即到に及ばず。い

かにいわんや、題目をも唱えざれば、觀行即到にいたるべし

き たいくう たんちゆう ふたんちゆう ほうもん 覺 けごんきよう

だいもく き ひと たんちゆう ふたんちゆう だいにちきよう

ほうどう ほんにやきよう だいもく き ひと しゃつくう

たいくう たんくう ふたんくう たんちゆう

ふたんちゆう り 覺 じっかいごく ひやつかいせんによ

さんぜんせけん みようかく くどく 聞

せん と ほけきよう ほか りそく ほんぷ か

きようぎよう ぶつぼさつ ほけきよう みようじそく およ

だいもく とな かんぎようそく

や。故に、妙楽大師、記して云わく「もし超八の如是に

ゆえ

みょうらくだいし

しる

い

ちようはち

によぜ

あらずんば、いづくんぞこの経の所聞となさん」云々。彼々

きよう

しよもん

うんぬん

かれがれ

の諸経の題目は八教の内なり、網目のごとし。この経の

しよきよう

だいもく

はつきよう

うち

もうもく

きよう

題目は、八教の網目に超えて大綱と申すものなり。

だいもく

はつきよう

もうもく

こ

たいこう

もう

今、妙法蓮華経と申す人々は、その心をしらざれども、

いま

みようほうれんげきよう

もう

ひとびと

こころ

知

法華経の心をうるのみならず一代の大綱を覚り給えり。例

ほけきよう

こころ

得

いちだい

たいこう

さと

たま

れい

せば、一・二・三歳の太子、位につき給いぬれば、「国は我

いち

に

さんさい

たいし

くらい

即

たま

くに

わ

が所領なり、摂政・関白已下は我が所従なり」とはしら

しよりよう

せつしよう

かんぱくいげ

わ

しよじゆう

知

せ給わねども、なにもこの太子の物なり。譬えば、小児は

たま

何

たいし

もの

たと

しように

ふんべつ ころろ

ひも ちち ぐち 飲

じねん

分別の心なけれども、悲母の乳を口にのみぬれば自然に

しょうちよう ちようこう ころろ 傲 しんか たいし

生長するを、趙高がように心おごれる臣下ありて太子

悔 み 滅 しょうきよう しょうしゆう がくしやとう ほけきよう

をあなずれば身をほろぼす。諸経・諸宗の学者等、法華経

だいもく とな たいし ちようこう

の題目ばかりを唱うる太子をあなずりて、趙高がごとくし

むけんじごく お ほけきよう ぎようじや ころろ 知

て無間地獄に墮つるなり。また法華経の行者の、心もしら

だいもく とな しょうしゆう ちしや 脅 たいしん

ず題目ばかりを唱うるが、諸宗の智者におどされて退心を

起 胡 亥 もう たいし ちようこう 殺

おこすは、こがいと申せし太子が趙高におどされ、ころさ

れしがごとし。

なんみようほうれんげきよう もう いちだい かんじん

南無妙法蓮華経と申すは、一代の肝心たるのみならず、

ほけきよう こころ

たい しよせん

ほうもん

法華経の心なり、体なり、所詮なり。かかるいみじき法門な

ほとけ めつごにせんにひやくにじゅうよねん あいだ がっし ふほうぞう

れども、仏の滅後二千二百二十余年の間、月氏に付法蔵の

にじゅうしにんぐつう たま かんど てんたい みようらく る ふ たま

二十四人弘通し給わず。漢土の天台・妙楽も流布し給わず。

にほんこく しようとくだいし だんぎようだいし せんぜつ たま

日本国には聖徳太子・伝教大師も宣説し給わず。されば、

わほっし もう ひがごと しよにんうたが しん

「和法師が申すは僻事にてこそあるらめ」と諸人疑つて信

だいいち どうり たと しようくん 怪

ぜず。これまた第一の道理なり。譬えば、昭君などをあや

つわもの 犯 ひと

しの兵なんどがおかしたてまつるを、みな人、「よも、さ

おも だいいん くぎよう てんたい

はあらし」と思えり。「大臣・公卿なんどのようなる天台・

でんぎよう ぐつう ほけきよう かんじん なんみようほうれんげきよう わ

伝教の弘通なからん法華経の肝心・南無妙法蓮華経を、和

ほつしほど

とな

うんぬん

法師程のものがいかで唱うべし」と云々。

なんだち

し

からす

もう

とり

むげ

下衆ちよう

汝等これを知るや。鳥と申す鳥は、無下のげす鳥なれど

わし

くまたか

し

ねんじゆう

きつきよう

し

へび

もう

むし

も、鷲・鵬の知らざる年中の吉凶を知れり。蛇と申す虫

りゆう

ぞう

およ

しちにち

あいだ

こうずい

し

は、竜・象に及ばずとも、七日の間の洪水を知るぞかし。

りゆうじゆ

てんだい

し

たま

ほうもん

きようもんけんねん

たとい竜樹・天台の知り給わざる法門なりとも、経文顕然

うたが

たも

にちれん

卑

ならば、なにをか疑わせ給うべき。日蓮をいやしみて

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

しように

ちち

疑

南無妙法蓮華経と唱えさせ給わぬは、小児が乳をうたごうて

嘗

びようにん

くすし

うたご

くすり

ふく

なめず、病人が医師を疑うて薬を服せざるがごとし。

りゆうじゆ

てんじんとう

し

たま

とき

き

ぐつう

竜樹・天親等はこれを知り給えども、時なく機なければ弘通

たま

よにん

知

せんてん

ぶつぼう

し給わざるか。余人はまたしらずして宣伝せざるか。仏法は

とき

き

ひろ

い

にちれん

時により機によりて弘まることなれば、云うにかいなき日蓮

とき

そつろつ

が、時にこそあたりて候らめ。

せん

みようほうれんげきよう

ごじ

とうじ

ひとびと

な

詮ずるところ、妙法蓮華經の五字をば、当時の人々は名

おも

そつろつ

たい

たい

こころ

とばかり思えり。さにては候わず、体なり。体とは心に

そつろつ

しょうあんい

じよおう

きよう

げんい

の

て候。章安云わく「けだし、序王とは經の玄意を叙ぶ。

げんい

もん

こころ

の

うんぬん

しゃく

こころ

みようほうれんげきよう

玄意は文の心を述ぶ」云々。この釈の心は、妙法蓮華經

もう

もん

いつきよう

こころ

しゃく

と申すは、文にあらず、義にあらず、一經の心なりと釈

そつろつ

だいもく

離

ほげきよう

こころ

たず

せられて候。されば、題目をはなれて法華經の心を尋ぬ

もの さるる 者は、猿をはなれて肝をたずねしはかなき亀なり。山林を
捨 このみ たいかい ほとり 求 えんこう
すてて菓を大海の辺にもとめし猿猴なり。はかなし、は
かなし。

けんじさんねんひのとうししもつきにじゅうはちにち
建治三年丁丑霜月二十八日

にちれん かおう
日蓮 花押

そやじろうにゆうどうどの
曾谷次郎入道殿